

## 認知的閉じと指標性

## ——ネガティブ・フィードバックとしての指標と集合的記号実践

谷島 貫太（二松学舎大学）

## 発表要旨：

現代の認知科学・記号論をベースとしながら、認知的閉じを出発点としつつ集合的な記号実践の創発を論じる試みが展開されている。谷口忠大らの集合的予測符号化（Collective Predictive Coding, CPC）はその代表例であり、その理論的基盤には自由エネルギー原理、能動的推論、エナクティビズム、そしてその淵源の一つとしてオートポイエーシス論やセカンドオーダー・サイバネティクスといったネオサイバネティクスの伝統がある。

これらの枠組みは共通して、認知的に閉じた個体がいかにして他者との協働的な記号実践に参加するかという問いに直面する。本発表はこの問いに対して、パースの指標(index)概念に基づく視点の転換を提示する。指標は伝統的に、対象との実在的連結を担う記号として捉えられてきた。しかし認知的閉じを前提とする場合、指標の対象との連結は、外界の透明な指示として受け取ることはできない。本発表が提示するのは、指標における「対象との実在的連結」を、主体の世界仮説にとって現実との衝突が生み出すズレ——驚き・攪乱・他者との齟齬——の検出プロセスの中に位置づける視点だ。

この視点から言語を介した間主観的な記号実践を捉える時、指標は、異なる主体間のフレーミングのズレを、ネガティブ・フィードバックを介して相互調整する作動として位置づけられる。Silverstein が言語人類学の文脈で展開した社会的指標性論は、この間主観的水準における指標的働きの具体的記述として解釈できる。その上で、Silverstein がメタ語用論において展開した「較正 (calibration)」概念に着目する。認知的閉じを前提とした問題系のもとで捉え直すならば、「較正」は、主体間のフレーミングのズレを介した相互調整を通して、記号システムの集合的構築・維持を可能とする基盤的な機構として再定式化される。

この拡張的読解は、Silverstein の較正論を経由しつつ、パースの指標概念そのものを「対象との実在的関係」という静的定式から「世界投錨と間主観的フレーム調整を貫くズレを介した較正的作動」として位置づけなおす。本発表の読解は、CPC をはじめとする集合的認知モデルへの記号論的基礎づけとして位置づけられると同時に、ネオサイバネティクスの伝統における認知的閉じから出発する記号論の可能性を模索するものでもある。

Silverstein, M. (1993). Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics* (pp. 33–58). Cambridge University Press.

Silverstein, M. (2003). Indexical Order and the Dialectics of Sociolinguistic Life. *Language & Communication*, 23(3–4), 193–229.

Taniguchi, T. (2024). Collective Predictive Coding Hypothesis: Symbol Emergence as Decentralized Bayesian Inference. *Frontiers in Robotics and AI*, 11, 1353870.